

甲虫ニュース

COLEOPTERISTS' NEWS

日本産ミズギワゴミムシ類の知見*

Bembidion inouyei HABU について

森田 誠 司

イノウエマダラミズギワゴミムシ *Bembidion (Eupettedromus) inouyei* HABU (1972, p. 17) は、北海道およびシベリア(?)に分布する大型のマダラミズギワゴミムシで、北海道では、低湿地に比較的ふつうに見られる。しかし、この種の命名には疑問点がある。それで、筆者がいろいろと調べた結果について、ここに報告しておきたいと思う。

土生が新名を与えるにあたって、北海道産の1雄の標本を、LINDROTH に送り同定を求めたところ、*B. (E.) sibiricum* (MOTSCHULSKY) sensu NETOLITZKY であるという回答を受け取ったという。そして、CSIKI のカタログ(1928)を調べた結果から、*sibiricum* という種名はすでに DEJEAN (1831) により先取されていると考え *inouyei* という新名を与えた。土生も述べているが、CSIKI によると、*sibiricum* なる種名は、まったく異なった3種のミズギワゴミムシ類(属を大きく解釈すれば *Bembidion* を用いるが、分割する研究者もいる)に与えられた。それらは、

1) *Bembidion (Eupettedromus) sibiricum* DEJEAN, 1831 (Spec. gén. Coléopt., 5, p. 136).

のちに、CSIKI (1928, p. 57) により、*B. (E.) dentellum* の変種とみなされた。また、

POPPIUS (1906, p. 27), NETOLITZKY (1942, p. 76) らは、独立種とみなしている。

2) *Trachypachus sibiricus* MOTSCHULSKY, 1844 (Mem. Acad. Sc. St. Pétersb., 5, p. 270).

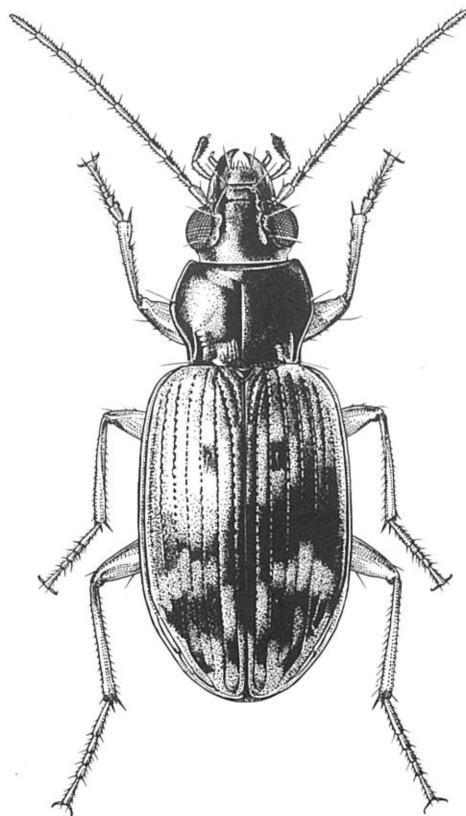
この種は、属 *Bembidion* に移すと 1) の DEJEAN に先取されるため、1868年、GEMMINGER と HAROLD により *vitiosum* という新名が与えられている。*Eurytrachelus* 亜属に属し(上野, 1954, p. 47)、今、問題にしている *Eupettedromus* とは、まったく関係がない。

3) *Lopha sibirica* MOTSCHULSKY, 1850 (Käf. Russl., p. 12).

この種は、土生も述べているように、*B. (s. str.) quadrimaculatum* (LINNAEUS) の同物異名とされて、とくにここでは問題にならないので除外しておく。

すでに述べたように、土生は、LINDROTH から得た同定結果、*B. (E.) sibiricum* (MOTSCHULSKY) sensu NETOLITZKY と、CSIKI のカタログにある2番目の種 *Trachypachus sibiricus* MOTSCHULSKY とが同一のものであると考えた。それで、*sibiricum* という名称は DEJEAN によって先取されているという結論を導き、新名 *inouyei* におきかえたのだ、と筆者は考えている。

ところが、話は少し複雑に



北海道 Nayoro 産, *Bembidion (Eupettedromus) inouyei* HABU (♂)

* MORITA, Seiji. Notes on *Bembidion inouyei* HABU.

なる。LINDROTH の同定した *B. (E.) sibiricum* (MOTSCHULSKY) という種を、MOTSCHULSKY は記載していないのである。それでは、LINDROTH と土生が、なぜこのような架空の種の存在を、信じてしまったのだろうか。この疑問は、簡単に解決できた。この仲間の甲虫類を調べるのに、まずだれもが当たるのは、NETOLITZKY の手になる旧北区のミズギワゴミムシの検索表であろう。そこには、確かに *B. (E.) sibiricum* Mtsch. という種が、出てくる。しかし、上野俊一博士からいただいた、筆者の手元にあるこの検索表のコピーには、NETOLITZKY 自身の手で Mtsch. のところに斜線が引いてあり、DEJ. と訂正されている。おそらくこの誤りは、単なる思い違いかミスプリントであり、LINDROTH と土生というふたりの偉大なゴミムシの専門家の手元にあった別刷には、訂正がなされていないのであろう。

それではいいたい、*B. inouyei* HABU という名称の処遇はどうなるのであろうか。すくなくとも手元の標本をヨーロッパ産の *B. dentellum* と比べた限りでは、これらが別種であるように思われる。したがって、*B. sibiricum* DEJEAN の基準標本(独立種と認めるならば)と、農業環境技術研究所に保存されている Obihiro 産 1♂、1♀および、Nayoro 産 3♂、1♀、それに性別不明の 1 ex. を、比較研究することによって、結論を出す必要がある。その結果、もし *B. inouyei* が別の独立種として区別されるならば、新たに、基準標本の指定を伴う新名が与えられなければならない。もし、同一種であるという結果がえられたならば、*B. sibiricum* DEJEAN を用いるのは当然であろう。また仮りに、*B. sibiricum* DEJEAN が *B. dentellum* と同一のものであり、しかも日本のものは別種であるということならば、*B. inouyei* にはあらためて新名をつけ、基準標本の指定も行なわなければならない。いずれにしてもこれは将来の研究にまつことであるが、思いがけない問

題が隠されていることだけをここで指摘しておきたい。

末筆ながら、ご指導下さり校閲の労をとられた国立科学博物館の上野俊一博士、貴重な文献をコピーして下さったり、種々ご教示下さった佐藤正孝教授、大桃定洋博士、秋山黄洋、高桑正敏の各氏に厚くお礼を申し上げます。さらに標本の描画についてお世話をかけました小堀文彦氏に深謝いたします。

参考文献

- CSIKI, E., 1928. Carabidae: Mormolycinae, Harpalinae I. In JUNK, W., & S. SCHENKLING (eds.), *Coleopterorum Catalogus*, pars 97 (pp. 3-226). W. Junk, Berlin.
- HABU, A., 1972. On a species of *Eupetedromus*, a subgenus of *Bembidion*, found in Hokkaido, North Japan (Coleoptera, Carabidae). *Ent. Rev. Japan, Osaka*, 24: 17-19.
- JEDLIČKA, A., 1965. Monographie des Tribus Bembidiini aus Ostasien (Coleoptera, Carabidae). *Ent. Abh. Mus. Tierk. Dresden*, 32: 79-198, 1 col. pl.
- NETOLITZKY, F., 1942-43. Bestimmungs-Tabellen europäischer Käfer. (9. Stück.). II. Fam. Carabidae. Subfam. Bembidiinae. 66. Gattung: *Bembidion* LATR. Bestimmungstabelle der *Bembidion*-Arten des paläarktischen Gebietes. (Mit Hinweisen auf holarktische, äthiopische und orientalische Arten.). *Koleopt. Rdsch., Wien*, 28: 29-124 (1942); 29: 1-70 (1943).
- POPPIUS, B., 1906. Beiträge zur Kenntniss der Coleopteren-Fauna des Lena-Thales in Ost-Sibirien. II. *Öfvers. Finska Vet.-Soc. Förhandl.*, 48: 1-65.
- SOLSKY, S., 1868. Genres et espèces d'Insectes, publiés dans différents ouvrages par Victor MOTSCHULSKY. *Hor. Soc. ent. ross., supplément*, 6: 1-118.
- 上野俊一, 1954. 日本の甲虫(17). 新昆虫, 東京, 7(5): 44-50.

(東京都港区)

○福島県檜枝岐のオケサマルクビゴミムシ

オケサマルクビゴミムシ *Nebria saeviens* BATES は、基産地の佐渡ヶ島をはじめ新潟県の各地にみられ、生息地での個体数は少なくないようである。

1990年6月に福島県南会津郡檜枝岐村でおこなわれた日本鞘翅学会の採集会では、本種が各所で得られたが、筆者が採集したものをここに記録しておく。ただし、目撃個体の大多数が羽化後間もない未成熟個体であったため、実際に採集したものはごく一部である。

3頭、トクサ沢, 23. vi; 5頭、道行沢, 24. vi; 2頭、見通川, 25. vi.

採集地は只見川および檜枝岐川支流の源流部で、今後さらに福島県内上記二河川の流域各地における本種の発見が予想される。

(千葉県船橋市, 笠原須磨生)

○灯火に飛来したサツマウバタマムシの記録

1990年の夏、台湾に採集に行ったとき、宿泊地である谷関で、屋外に設けてあるトイレの白壁の下で、サツマウバタマムシ (*Chalcophora yunnana formosana* Y. KUROSAWA, 1974) を採集した。採集時刻は午前6時頃で明るくなり始めた頃であり、トイレの灯火に飛来し、そのまま下に居た個体であるとする。タマムシが灯火に飛来した例は、アオタマムシの記録*があるが少ないので記録しておく。

1♀、台湾省台中県谷関(高度800m), 14. vii. 1990, 筆者採集

なお、当日は午前中が晴で、午後が雨であった。

文 献

- *藤田宏 1970. 灯火に飛来したアオタマムシ. 甲虫ニュース, (11): 4

(横浜市中区, 服部宇春)

ブレンスケチビビロウドコガネ (*Microserica brenskei* REITTER) について

〔日本産コガネムシ類に関する考察 (I)〕

藤 岡 昌 介

「日本産コガネムシ主科目録」(1988)を作成する過程で、私が疑問を持った種のひとつに表記の種がある。これを目録から除いた理由を書いてみたい。

この種は REITTER によって 1896 年日本の横浜から記載された種で、その後、彼の検索表(1903)にも掲載され、また、BRENSKE (1897) によってその大著「世界のビロウドコガネ種」の中でも再記載されている。

日本では新島・木下(1923)の演習林報告や三輪・中条(1939)の日本産鞘翅目分類目録に収録されており、特に後者は表記のような和名までつけられている。また、野村の日本産コガネムシ主科目録(1960)では、*M. brenskei* をコビロウドコガネの新和名で記載されているが、1937 年以降の沢田の一連のビロウドコガネ亜科の研究や、野村の日本産ビロウドコガネの総説(1973, 1976)ではふれられていない。

筆者は寡聞にして、日本からこれに該当する種が採集されたということを知らない。そこで、すでに日本から記録されたことのある既知種から、これに当たる種を求めるために REITTER などの記載を検討してみた。

この種は、原著者によると体は短卵形、黒緑色、触角と脚が赤褐色でその会合部が暗色、肩部に明瞭な瘤起を欠くこと、後脚の第 1 跗節が第 2 節の約 2 倍、体長は 3.5 mm、産地は日本の横浜で HEYDEN の蒐集品であるとなっている。極めて簡単ではあるが、これは検索表の中なので、これを逆にたどればその属性がはっきりするはずである。それによると *brenskei* はチョウセンシマビロウドコガネ *M. herzi* HEYDEN と対比させて、1894 年に BRENSKE が設立した *Microserica* の中に入っている。

この時点では、*herzi* のほうが当然はいるべき *Gastroserica* 属は未だ創設されておらず、BRENSKE によって創設されたのはその翌年の 1897 年のことである。この *Gastroserica* 属が設立された時点でわかっていたことは、前胸背の前角が *Microserica* 属では突出するがこの属ではない、後角ではその逆になっていることや、この属では前胸側板の後方に横溝があること位で、触角の片状部の数など重複する点が多いので、両種を *Microserica* 属に含めたのは当然かもしれない。ただ、1897 年 *Gastroserica* 属を設立した同じ論文の中で、これら両種(特に *herzi*)を、BRENSKE は REITTER の扱いのまま *Microserica* 属に含めているのである。BRENSKE の記載は REITTER の孫引きではなく、タイプ標本を調べているらしく、「STAUDINGER の採集した HEYDEN のコレクション」と詳しくなり、体長 3.7 mm、幅 2.5 mm と細かく記されていて、ジャワ産の

M. compressipes WIEDEMANN と、間違えるほど似ているとし、この種との比較の上で記載をおこなっている。

そこで、*compressipes* の記載を調べてみると、これは真の *Microserica* 属そのものであって、*herzi* を *Microserica* 属とした疑問は残るが、REITTER や BRENSKE が考えたように *brenskei* は真の *Microserica* 属と考えてさしつかえないと思われる。

体色や触角の片状部の数などは、日本産のビロウドコガネ類の中に *brenskei* に似たものがいくつか考えられる。しかし、それがチョウセンシマビロウドコガネに比べて短太な体型で、体長 3.5 mm~3.7 mm 位の *Microserica* 属に属するビロウドコガネは、その後日本から発見されていない(*Microserica* 属は琉球列島からは未知で、台湾以南に広く分布し、多数の種が記録されている)。

すなわち *Microserica brenskei* REITTER は日本産の種ではないと考えた。そこで一応日本産の目録からはぶいておいたほうがよいと考えたのである。

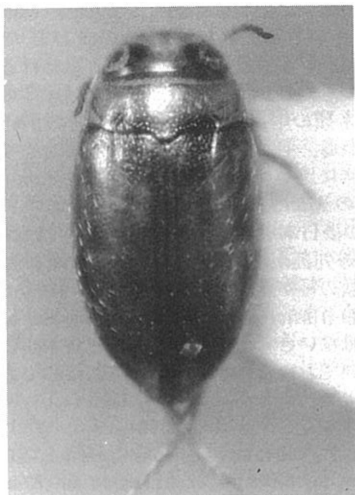
参考文献

- BRENSKE, E., 1894. Die Melolonthiden der Palaearctischen und orientalischen Region im Königlichen naturhistorischen Museum zu Brüssel.—*Mém. Soc. ent. Belg.*, II: 1-87.
 —, 1897. Die *Serica*-Arten der Erde.—*Berliner ent. Zeit.*, XLII, Heft 3/4: 345-438.
 —, 1898. Die *Serica*-Arten der Erde, B. Orientalische Region.—*ibid.*, XLIII: 205-404.
 石田正明・藤岡昌介, 1988. 日本産コガネムシ目録(第一版補訂版).—*Lamellicornia*, (suppl. 2), 62pp., Tokyo.
 三輪勇二郎・中条道夫, 1939. 日本産鞘翅目分類目録, 94 pp. 金亀子虫科. 一野田書房, 台湾.
 新島善直・木下栄治郎, 1923. こがねむしに関する研究報告(第二).—北海道大学農学部演習林報告 2(2), 253 pp., pls.
 野村 鎮, 1960. 日本産コガネムシ類目録. 一桐朋学報(10): 39-70.
 —, 1973. 日本産ビロウドコガネ族について.—*ibid.*, (23): 120-152, pls.
 —, 1976. 日本産ビロウドコガネ族について(その 2).—*ibid.*, (26): 167-205.
 REITTER, E., 1896. Uebersicht der mir bekannten palaearktischen, mit der Coleopteren-Gattung *Serica* verwandten Gattungen und Arten.—*Wiener ent. Zeit.*, XV, Heft 5/6: 180-188.
 —, 1903(1902). Bestimmungs-Tabelle der Melolonthidae aus der europäischen Fauna und den angrenzenden Ländern, enthaltend die Gruppen der Pachydemini, Sericini und Melolonthini.—*Verh. naturw. Ver. Brün.*, 40: 93-303.

(東京都北区)

○琉球列島に広く分布するチャマダラチビゲンゴロウ

本種は、阿部(1989 a, b)により、石垣島宮良(1頭)、西表島大富(2頭)から日本新記録として報告されている。著者は、阿部光典氏の好意により標本を貸与していただき、1987~1989に採集した手持ちの琉球列島の標本を再検したところ、すでに報告された石垣島・西表島を含め、以下に挙げた島々よりはば広く本種を確認した。ここに新分布として報告する。



著者が採集にまわった中で、与論島・伊平屋島・伊是名島・与那国島・南大東島では、近似種の *Guignotus japonicus* (SHARP) チビゲンゴロウのみが得られ、*G. inconstans* (RÉGIMBART) チャマダラチビゲンゴロウは、得られなかった。逆に、宮古島からは、*G. japonicus* は、まったく得られず、*G. inconstans* のみが得られた。他の島々からは、両種が同所的に得られている。奄美大島が北限のようである。

なお、採集者は、すべて著者である。

Guignotus inconstans (RÉGIMBART, 1892) チャマダラチビゲンゴロウ

奄美大島：竜郷町屋入(5頭, 25. iii. 1988),
竜郷町浦(7頭, 25. iii. 1988)
名瀬市小湊(4頭, 26. iii. 1988)

徳之島：徳之島町大原(45頭, 18-19. viii. 1987)
徳之島町神瀬ダム(10頭, 18. viii. 1987)

沖之永良部島：知名町余多川(2頭, 16. viii. 1987),
和泊町長嶺(1頭, 16. viii. 1987)

沖縄本島：名護市後原(1頭, 18. viii. 1989),

名護市手水(3頭, 19. viii. 1989),

久米島：上江洲(4頭, 15. viii. 1989),
具志川村仲村渠(3頭, 15. viii. 1989 &
1頭, 16. viii. 1989)

宮古島：咲田川(1頭, 5. viii. 1989),
城辺町新城(4頭, 5. viii. 1989)

石垣島：高田(11頭, 6. viii. 1989),
大里の池(14頭, 7. viii. 1989),
底原(1頭, 7. viii. 1989)

小浜島：(11頭, 9. viii. 1989)

西表島：大原(2頭, 10. viii. 1989),
南風見(7頭, 10. viii. 1989),
浦内(1頭, 11. viii. 1989),
古見(4頭, 12. viii. 1989),

末筆ながら貴重な標本を貸与され、ご教示いただいた阿部光典氏に厚く感謝の意を表する。

引用文献

- 阿部光典, 1989a. 日本新記録のゲンゴロウ2種. 甲虫ニュース, 87, 88: 1-3.
——, 1989b. 沖縄県産 Hydradeephaga の記録. 甲虫ニュース, 87, 88: 9-12.

(熊本県本渡市, 松井英司)

○福井県下のクロキノコゴミムシシダマシの記録

福井県のゴミムシシダマシ科は、福井県昆虫目録(1985)によって記録が整理されており、同県は全国的にみても非常に調査の行き届いた地域である。筆者は、上記目録に記録されていないクロキノコゴミムシシダマシ *Platydesma fumosum* LEWIS の標本を所持しているの、ここに報告しておく。

1頭, 福井県高浜町, 29. v. 1983, 伊藤 武 採集
採集者によれば、サクラの古木の腐朽部分より得たものということである。

貴重な標本を恵与された、神戸市の伊藤 武 氏に心よりお礼申し上げます。

(東大阪市, 加藤敦史)

◇「ニュース」の原稿送付先◇

143 東京都大田区南馬込 1-38-6, 阿部光典
Tel. 03-771-1065

「珍品を独り占めにして誰にも教え、深夜、その標本を眺めてニタリと笑う」というのも捨て難い快感ですが、調査・研究の成果を公表すれば、もっと大きな喜びを味わえます。

気軽に投稿して下さい。投稿規定はありません。ハガキになぐり書きをしたものでも結構です。「ニュース」は珍品採集コンクールの場ではありません。「ド普通種の意外な生態」など大歓迎。是非、ペンを執って下さい。

“幻のゲンゴロウ”を沖縄で発見す*

阿部 光典

文献上では「日本に分布する」とされているが国内に1頭の標本もなかったゲンゴロウがある。

Laccophilus flexuosus AUBÉ がそれである。

この *Laccophilus* 属 (ツブゲンゴロウ属) に含まれる種は体長が 2.0 mm~4.0 mm ほどの小型種で、ヨーロッパ、北米には少ないが、エジプトから東南アジアに至る地域および南米に多くの種が分布している。全世界から 100 種以上が記載されているが、まだ未記載種が 30 以上はあるだろうと推定されている。日本からは、現在までのところ、7 種が報告されている。分布域における個体数は、通常、多い。

さて、この *Lacc. flexuosus* の基産地はインド南部のマドラス州ポンディシェリー (Pondichéry) で、1836 年に Perrotet によって採集された2個体に基づいて、AUBÉ が 1838 年に記載している。

その後、この種には SHARP, RÉGIMBART, ZIMMERMANN, BALFOUR-BROWNE, GUIGNOT, VAZIRANI, その他、の研究者によって繰り返し検討が加えられ、その一部は *Lacc. solutus* (中国産)、*Lacc. cognatus* (インド産)、*Lacc. chloroticus* (中国産) などという独立種として扱われたり、それらが *Lacc. flexuosus* の亜種に降格されたり、最終的には、これらすべてが *Lacc. flexuosus* のシノニムとして消されるといふ歴史をたどってきた。

日本では TAKIZAWA (1932) が台湾産の個体を *Lacc. formosanus* として記載し、KAMIYA (1938) はこの *formosanus* と *flexuosus* を含めて *Lacc. sharpi* として処理した。しかし *formosanus* は GSCHWENDTNER (1939) によって *Lacc. flexuosus* のシノニムとされるに至る。一方、KAMIYA の処理方法については、かなりの無理があるように思われる。非常に失礼な推測となるが、彼は *flexuosus* や *formosanus* に関する文献を正確に検討していなかったのではなかろうか、と思わざるを得ない。

以上のような経過をみると、この *flexuosus* の同定が、そう簡単ではないことが想像できる。すくなくとも、外見だけで同定するの

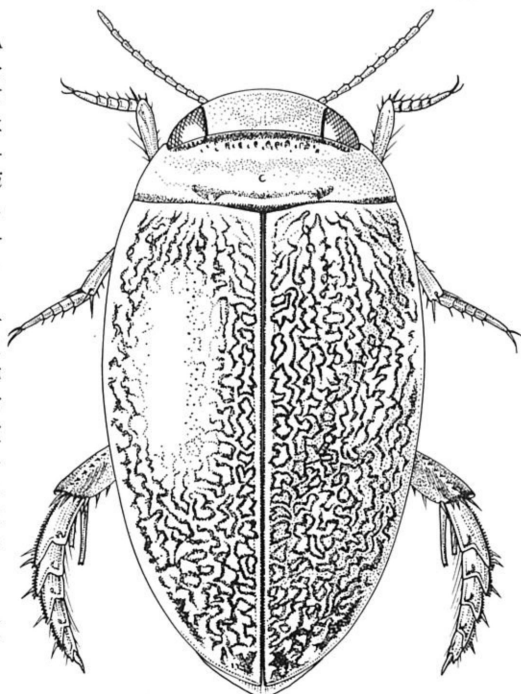
は、よほど多数の標本を見ていない限り、難しいといえる。

ところで、この *Lacc. flexuosus* が「日本に分布しているらしい」ことは、文献上では、100 年以上も前から知られていた。そのひとつは SHARP (1882) のモノグラフである。そこには「メソポタミアから日本に至るアジアに広く分布する」とあって、その後にコロ (:) を打って「ベルシア、インド北部、スマトラ、ホンコン、台湾」と具体的地名が書いている。しかし日本についての具体的地名はない。どうも不明確な記述である。SHARP が「台湾は日本領土」と勘違いした可能性についても考えてみたが、台湾が日本統治下に入ったのは下関条約 (1895) 以降であり、SHARP の論文はそれ以前であるから、この推量は成り立たないだろう。SHARP 本人も「分布域西部産の標本しか知らない」と告白 (?) している。

もうひとつの文献は BRANCUCCI が 1983 年に発表したものである。その中で彼は「Japon, Honshu: Mimasaka, vii. 1912, J. C. Thompson (1ex., CAS). Kobe, 1908, J. C. Thompson (1ex., CAS). 」と記している。Mimasaka は岡山県美作町と思われる。Kobe は当然、神戸であろう。CAS は California Academy of Science 所蔵の意。

日本でこの種について触れている最近の文献は2つあり、ひとつは「日本産昆虫総目録 (1989)」で、ここでは佐藤正孝教授がナミスジツブゲンゴロウの和名で、本州に産することを記している。他のひとつは「昆虫と自然 (1989年4月号)」で、そこでは中根猛彦教授が同じ和名で解説している。いずれも、BRANCUCCI の論文が基になっていると思われる。日本産の標本は国内には1頭もなかったのである。

筆者は 1988 年に沖縄本島北部でゲンゴロウ類の調査をした際に、それまでに見たことのないツブゲンゴロウを採集した。「沖縄県産 Hydradephaga の記録」を「甲虫ニュース・87号」に投稿した時点では調



Laccophilus flexuosus AUBÉ, 沖縄本島産,
小堀文彦氏描画。

* ABE, Terutsune: Rediscovery of *Laccophilus flexuosus* AUBÉ in Japan

査研究が不充分であったので省いておいたが、その後の研究で、これが *Lacc. flexuosus* であることが判明したので、本稿で解説・記録しておくことにした。

今後、この種が本州、特に関西以西、で再発見されることを期待したい。

***Laccophilus flexuosus* AUBÉ, 1838**

サザナミツゲンゴロウ (新称)

体長は 3.4~4.4 mm。沖縄県産の個体は比較的大型で体長のばらつきは少ないが、ネパール産のものはやや小型で体長のばらつきがある。体型は長卵型で翅端に近づくにつれて少し細くなる。全体的に光沢がある。

頭部は明るい淡黄褐色。触角も全節が頭部と同色。頭盾はかくれていて見えない。

前胸背板も頭部と同色であるが、前縁の両眼にはさまれた部分、および、後縁に沿ってせまい淡褐色部がある。前角はとがらずにまいる。後角は鋭角であるが先端はとがらない。後縁は中央部で後方へ少しふくらむ。

上翅も前胸背板と同色であり、多数の、細くて褐色の線が、側縁部を除いて、上翅全面にさざ波状に走っている。これらの線は、その流れ方がきわめて不規則であり、

①2本が対になって流れ、最終的には前後で合流して非定形的な環状紋を形成したり、または、

②1本の線がジグザグに流れて最終的には細く、かすかになって消滅し、環状紋を形成しなかったりする。

しかし、すべての線が一定の部位で切れて黄褐色の横帯紋を形成することはない。印刻は強くも弱くもない。それらは多角形をした網目状印刻の中に、小さい網目状印刻を包み込んで2重印刻を形成する。小盾板は認められない。

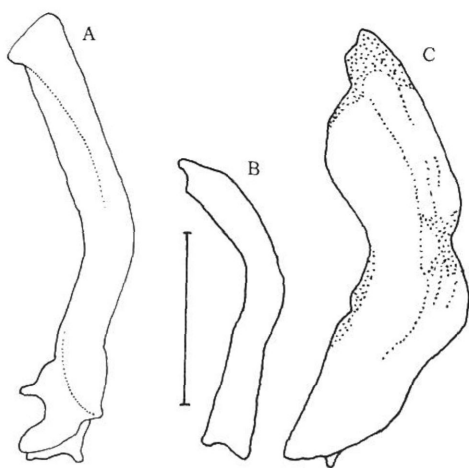
腹部も明るい黄褐色。

後脛節の端刺は先端が2叉状、前・中肢の附節は5節。

陰茎は先端に至るまで、ほぼ同じ幅で、すこしねじれ、基部から2/5ほどのところで少し曲がる。陰茎下面には、先端近くに凹みがある。側片は菱形に近く、左右同形ではない。左側片は右側片よりも長く、先端部もより尖っている。側片頂部からは多数の長毛から成る毛束が突出している。

注記: この種は上翅の紋に変化が多く、*Lacc. sharpi* や *Lacc. parvulus* にきわめてよく似ているが、一見して強く受ける印象は、上翅が明るいレンガ色であること、さざ波状の紋がはっきりしていること、の2点である。正確な同定をするためには♂のゲンタリアを検査することが必要である。参考までに *sharpi* と *parvulus* のゲンタリアのスケッチを付記しておく。

記録: 71頭、沖縄県名護市汀間 (テマ)、7. i. 1988, 筆者採集。15頭、同市饒波 (ヌウハ)、8. i.



陰茎側面図。A: *L. flexuosus*, B: *L. parvulus*, C: *L. sharpi*, スケールは 0.5 mm.

1988, 筆者採集。

さらに以下の標本も検した。2頭、沖縄県伊平屋島田名 (ダナ)、20. viii. 1989, 松井英司採集。2頭、同県久米島仲村渠 (ナカンダカリ)、16. viii. 1989, 松井英司採集。1頭、同県西表島浦内、28. iii. 1988, 杉山恵一採集。34頭、Nepal, Kathmandu Prov., Damauli nr. Pokhara, 26. iii. 1989, leg. K. Sugiyama。5頭、Sri Lanka, Colombo City, 28. iii. 1989, leg. K. Sugiyama。

既知産地: 西パキスタン、インド、スリランカ、アンダマン諸島、ニコバル群島、ミャンマー、ネパール、スマトラ、ベトナム、カンボジア、ホンコン、中国、台湾、日本 (兵庫県神戸市、岡山県美作町、鹿児島県徳之島、沖縄県久米島・伊是名島・伊平屋島・沖縄本島・西表島)。

なお、松井英司氏は鹿児島県・沖縄県を精力的に調査されており、この種の分布についても「北九州の昆虫 37-2 号」に報告されている。参照されたい。

謝辞: 文献に関しては黒沢良彦、佐藤正孝、鈴木瓦、M. BALKE の諸氏にお力添えを頂いた。また、黒佐和義、杉山恵一、松井英司の諸氏のおかげで各地の標本を検することができた。さらに小堀文彦氏には今回も見事な絵を描いて頂いた。記して深謝する次第である。

主要参考文献

- D. SHARP (1882). On Aquatic Carnivorous Coleoptera or Dytiscidae. *Sci. Trans. R. Dublin Soc.* 2: 310
- Al. ZIMMERMANN (1930). Monographie der paläarktischen Dytiscidae, 1: 20
- K. KAMIYA, (1938). A Systematic Study of the Japanese Dytiscidae. *J. Tokyo Nogyo Daigaku* 5: 7
- T. G. VAZIRANI, (1969). Contribution to the Study of Aquatic Beetles (Coleoptera), *Oriental Insect* 2: 3-4,

245-246

M. BRANCUCCI (1983). Révision des espèces est-paléarctiques, orientales et australiennes du genre *Laccophilus*, *Ent. Arb. Mus. Frey* 31/32, 318-420

中根猛彦 (1989). 日本の甲虫 (86) 「昆虫と自然」 24: 4

佐藤正孝 (1989). 「日本産昆虫総目録」 コウチュウ目, 239

松井英司 (1990). 「琉球列島で採集した水生甲虫類 (1)」 北九州の昆虫, 37(2)

Summary

More than one hundred years ago, *Laccophilus flexuosus* AUBÉ was reported to occur in Japan by SHARP (1882), and a few years ago a more concrete explanation

appeared in BRANCUCCI's paper (1983). Through the latter literature, I came to know that two specimens which were caught in Honshu (the mainland of Japan) were kept in California Academy of Science, San Francisco. But, to our great regret, not a single specimen had been found in Japan.

In 1988, I was lucky enough to find many individuals occurring in Okinawa Pref., southwestern part of our country. But, in the mainland of Japan, no *Lacc. flexuosus* have been found as yet, except the two specimens reported by BRANCUCCI.

(東京都大田区)

○クロホシテントウゴミムシダマシ属雑記

1) 原色日本甲虫図鑑の記述並びに高橋・岩田 (1990) の記録の訂正

高橋・岩田 (1990) はニセクロホシテントウゴミムシダマシ *Derispia japonicola* MIYATAKE を九州から記録したが、これは中條道崇 (1985) (原色日本甲虫図鑑 (III)) に基づいて報告したものである。ところが、この中條 (1985) の記述が誤っており、これに伴い高橋・岩田 (1990) の記録も訂正を要することが判明した。

まず中條 (1985) の記述 (p. 312: 12 および 13) は、同書の図版 (pl. 52: 12 および 13) をそのままにすると、次のように訂正される。なおこれは MIYATAKE (1961) のレヴィジョンおよび同種原記載からも明らかである。

「12. ニセクロホシテントウゴミムシダマシ *Derispia japonicola* MIYATAKE

3.2 mm 前後。触角の第 5 節より末端節基半までと、前胸背板の基方中央部は黒褐色、小楯板と上翅斑紋は黒色。上翅の点刻列は比較的大きく、疎。間室はごくわずかに膨隆し、中央にジグザグの点刻列がある。本州、四国。

13. クロホシテントウゴミムシダマシ *Derispia maculipennis* (MARSEUL)

3.5 mm 前後。前種に似ているがより小さく、前胸背板は暗色部をもたず、上翅斑紋パターンをやや異にし、上翅の列状点刻はより疎で、間室中央の点刻もごく疎。本州、四国、九州、対馬；中国。」

要するに解説文はそのまま、種名と分布を交換すればよいことになる。

この誤りは森本 (1986) の同図鑑シリーズ正誤表において既に示唆されるところとなっていたが、訂正は不完全であった。

以上に従い、高橋・岩田 (1990) の記録を次のように訂正したい。

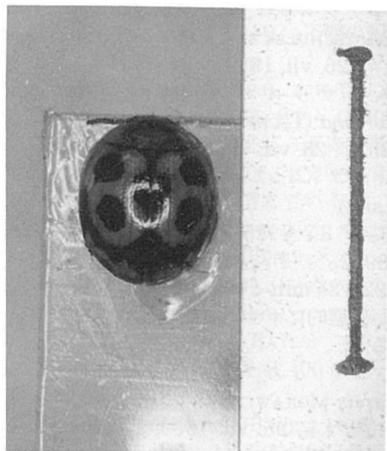
「クロホシテントウゴミムシダマシ *D. maculipennis* (MARSEUL): 2 頭、宮崎県東諸県郡綾町本庄川照葉大橋近辺, 21. viii. 1989, 高橋 寛採集。」

なお、この種は九州からは既に MIYATAKE (1961)

が記録している。

2) アマミクロホシテントウゴミムシダマシの竹富島からの記録

アマミクロホシテントウゴミムシダマシ *D. japonica* KASZAB: 1 頭、八重山群島竹富島, 20. iii. 1975, 岩田隆太郎採集 (写真)。



アマミクロホシテントウゴミムシダマシ
(スケールは 5 mm)

本種は竹富島からは未記録であった。

引用文献

中條道崇 (1985). (黒澤・久松・佐々治, 編) 原色日本甲虫図鑑 (III), 保育社, 大阪: 312.

MIYATAKE, M. (1961). *Trans. Shikoku Entom. Soc.*, 7(1/2): 33-40.

森本 桂 (1986). 原色日本甲虫図鑑第 II-IV 巻追補・正誤表, 保育社, 大阪, 12pp.

高橋 寛・岩田隆太郎, (1990). 甲虫ニュース, (89): 6.

(日本大学農獣医学部, 岩田隆太郎;
大阪府豊能郡豊能町, 安藤清志)

山形県飛島のゴミムシ類

須田 亨

山形県飛島の昆虫類に関しては、白畑・黒沢(1972)による詳しい調査報告があり、歩行虫類は17種が記録されている。しかし佐渡や粟島に比べ訪れる採集者は少なく、必ずしも十分な調査はなされていないと思われる。筆者は1989年7月に同島を訪れる機会を得、上記報告書にて記録済みの8種(*印を付したもの)を含め23種のゴミムシ類を採集することができたので報告する。

飛島は全島岩石からなり、タブノキを中心とした広葉樹林におおわれているが、小孤島ゆえにゴミムシ類の生息に適した沢や湿地といった環境に乏しく、採集については道路脇の側溝を見回する方法が最も効果的であった。

文末ながら発表を勧めて下さった森田誠司氏、文献のお世話をいただいた東洋大学の犬野正男教授に厚くお礼申し上げる。

1. キアシヌレチゴミムシ *Patrobus flavipes* (MOTSCHULSKY)
1♀, 26. vii. 1989
2. ムラサキオオゴミムシ *Trigonognatha coreana* (TSCHITSCHÉRINE)
2♂♂, 28. vii. 1989
3. オオゴミムシ* *Lesticus magnus* (MOTSCHULSKY)
3♂♂ 3♀♀, 25. vii. 1989; 1♂ 5♀♀, 26. vii. 1989; 2♂♂ 1♀, 28. vii. 1989

体長22~25 mmと大形で個体数も多い。飛島では本種が生態的にオサムシ類の代わりをしていると思われる。

4. アシミノナガゴミムシ *Pterostichus sulci-tarsis* MORAWITZ
3♂♂ 1♀, 25. vii. 1989; 1♂, 26. vii. 1989; 1♂, 27. vii. 1989
5. ヨリトモナガゴミムシ* *P. yoritomus* BATES
1♀, 26. vii. 1989; 1♂ 2♀♀, 28. vii. 1989
6. オオクロナガゴミムシ *P. prolongatus* MORAWITZ
1♂, 26. vii. 1989; 2♂♂ 8♀♀, 27. vii. 1989; 1♂, 28. vii. 1989

関東平野などで得られるものに比べ一回り大きい形態的な差異は認められなかった。海岸近くのイネ科草原に多く、糖蜜トラップによく入った。

7. コガシラナガゴミムシ* *P. microcephalus* (MOTSCHULSKY)
1♂ 1♀, 25. vii. 1989
8. セアカヒラタゴミムシ* *Dolichus halensis* (SCHALLER)
1♀, 27. vii. 1989
9. オオクロツヤヒラタゴミムシ *Synuchus nitidus* (MOTSCHULSKY)
1♂, 26. vii. 1989; 1♀, 27. vii. 1989

10. マルガタゴミムシ *Amara chalcites* DEJEAN
2♂♂ 1♀, 25. vii. 1989; 1♀, 28. vii. 1989
11. オオホシボシゴミムシ *Anisodactylus sadoensis* MORAWITZ
2♂♂ 2♀♀, 25. vii. 1989
12. ヒメゴミムシ *A. tricuspidatus* MORAWITZ
1♂, 25. vii. 1989; 3♂♂, 26. vii. 1989
13. アカシマルガタゴミムシ *Harpalus tinctulus* BATES
1♀, 25. vii. 1989; 1♂, 27. vii. 1989
14. クビナガゴモクムシ *Oxycentrus argutoroides* (BATES)
2♂♂ 1♀, 25. vii. 1989; 1♂, 26. vii. 1989
15. マメゴモクムシ* *Stenolophus fulvicornis* BATES
1♀, 27. vii. 1989
16. ミドリマメゴモクムシ *S. difficilis* (HOPE)
1♀, 27. vii. 1989
17. オオスナハラゴミムシ* *Diplocheila zelandica* (REDTENBACHER)
2♀♀, 25. vii. 1989; 1♂, 26. vii. 1989; 2♂♂ 1♀, 27. vii. 1989
本種はオオゴミムシなどと逆に体長20 mm前後と小形である。
18. フトキバスナハラゴミムシ* *D. macromandibularis* (HABU et TANAKA)
1♂, 25. vii. 1989; 11♂♂ 4♀♀, 28. vii. 1989
ほとんどが島の北東部の側溝内で得られた。
19. ヨツボシゴミムシ *Panagaeus japonicus* CHAUDOIR
1♂, 26. vii. 1989; 1♂, 27. vii. 1989
20. スジアオゴミムシ *Haplochlaenius costiger* (CHAUDOIR)
1♂, 25. vii. 1989; 1♀, 27. vii. 1989
21. オオアトボシアオゴミムシ *Chlaenius mi-cans* (FABRICIUS)
1♂, 28. vii. 1989
22. アトボシアオゴミムシ* *C. naeviger* MORAWITZ
1♀, 25. vii. 1989; 1♀, 27. vii. 1989
23. オオホソクビゴミムシ *Brachinus scotomedes* REDTENBACHER
1♀, 25. vii. 1989; 2♀♀, 27. vii. 1989

参考文献

白畑孝太郎・黒沢良彦(1972), 鳥海山・飛島の昆虫類, 鳥海山・飛島総合学術調査報告: 218-262

(群馬県伊勢崎市)

○サシゲチビタムシの分布北限更新

サシゲチビタムシ *Trachys robusta* SAUNDERS, 1873 は暖流の影響を強く受けて分布を拡大した暖地性の昆虫として知られている (黒沢, 1980)。日本海側では海岸に沿って福井県に達し、若狭湾沿岸の各地に産し、敦賀市常宮 (Jōgū) が北東限であった。このたび次の生息地が確認され、分布北限が更新され、やや内陸に位置するので、考察を加えたい。

7頭、福井市二上 (Futagami), 10. vi. 1990, 佐々治採集・保存。

福井市と鯖江市にまたがる文殊山の遊歩道登り口にある八幡神社境内のスタジイから得られたものである。南北差にして 30 km の更新にすぎないが、木ノ芽峠を境とする嶺北地方と嶺南地方ではかなり昆虫相が異なり、嶺南で分布が止まっている暖地性種の例が少なくないので、二上での発見の意義は小さくない。しかも二上は福井・鯖江低地の東寄りにあり、その低地は丹生山地の山塊によって海岸とは遠く隔てられていて暖流の影響はほとんどない。しかし、それは現在のことで縄文海進時代は海岸線が相当入り込んでいた可能性が強く、この付近の社叢林や丘陵地に照葉樹が点在しているので、その頃すでにサシゲチビタムシが分布を拡大していたとするならば、その遺存と考えられなくもない。なお、三国町雄島はスタジイ林が良く発達し、暖地性昆虫が多いが、度重なる調査にもかかわらず、サシゲチビタムシは見出されていない。また、越前海岸は酒井哲弥君によって入念に調べられているが、そこからも見つからない。

上記の考察があたっていれば面白いが、それを抜きにしても二上からの発見は分布上興味深い。

文献：黒沢良彦, 1980. 科博専報, (13): 45-51.

(福井大学教育学部, 佐々治寛之)

○シラホシキクスイカミキリのニガキよりの羽化例

山梨県韭崎町穴山町で、ニガキより、エゾナガヒゲカミキリが発生していることは知られている。筆者もエゾナガヒゲの採集を目的として、1989年9月、同地を中山不羈氏と一緒に訪れ、果敢にピーティングおよびスイーピングを行なったが、同種は全く得られず、念のため、新しい食痕のある枯枝を割ったところ、いくつかの成虫が得られた。30 cm 程度の長さの枯枝を9本持ち帰り、その後成虫が脱出してくることを期待したが、その秋に成虫の脱出は全くなく、翌春 14 頭の羽脱を得た。注目すべきことは、エゾナガヒゲカミキリに先立つこと数日前に、ニガキより、シラホシキクスイカミキリ *Eumecocera anomala* が羽化したことである。ニガキからの発生報告はないようなので、ここに報告する。

9. ix. 1989, 山梨県韭崎町穴山町にて材採取
2♂, 2♀, 21~23. iii. 1990, 横浜市内で羽化脱出。

(横浜市緑区, 大木 裕)

○コブスジコガネ 2 種の生態メモ

新潟県長岡市の悠久山公園は、山屋・片桐 (1983) および片桐・山屋 (1984) がマルコブスジコガネ *Trox mitis* BALTHASAR, チビコブスジコガネ *T. niponensis* LEWIS を多数採集したことを報じ、一躍有名になった場所である。筆者も 2, 3 年前に一度訪れたが、その時は死ガイを得ただけであった。しかし今春 (1990 年 5 月 4 日) 再度訪れた際には両種を多数採集でき、若干の生態的知見も得たので、その点をメモしておきたい。

両種共にサギ類の巣がかかっている 1 本のスギのまわりから得られた、そこには車のワダチと思われる畝があり、溝に雨水がたまり、サギ類の糞、食肉獣の糞、落葉が沈んでいた。*mitis* は、その水溜りの中や縁に多くみられ、約 100 頭程が採集された。目がなれると黒色の小石状の個体が識別できるようになり、採集は容易であった。また畝の底部側面 (水溜りの縁からは 10~20 cm はなれているが、土はかなり水分を含んでいる) に横穴があり、その中に 1 頭の成虫と卵が 5~6 粒発見できた。

一方 *niponensis* は水溜りから離れた食肉獣の糞のまわりに多く、数 10 頭を得たが、ペリット状の糞の下に毛を敷いた穴を穿っていた。その穴の中からも成虫を得たが、卵は発見できなかった。

今回は幼鳥の時期にはまだ早く、落下した卵が発見される程度であったが、これらのコブスジコガネ科の甲虫は、サギ類の死体だけでなく、落下した卵を漁る食肉性の動物の糞とも密接な関係を持っていると思われる。

(神奈川県座間市, 西川正明)

○シロモンマメゾウムシを東京都福生市で採集

マメゾウムシ科の甲虫は種類数も余り多くなく、報告例も少ないようである。

筆者はシロモンマメゾウムシ *Bruchidius compactus* (SHARP) を東京都で採集したので報告しておきたい。

2 頭、東京都福生市熊川, 17. v. 1990.

採集した場所は多摩川の河川敷内で、同地にはマメ科の落葉喬木であるニセアカシアが多数生育しており、ちょうど開花時期に当たっていたため、片端から花房をピーティングしたところ最盛期と思われる 1 本の木から上記 2 頭を採集することが出来た。最盛期前、ならびに最盛期を過ぎたと思われる他の木の花からは発見出来なかった。

筆者は本種の日本における詳しい分布地を知らないが保育社の甲虫図鑑 (IV) によれば本州に産し稀とある。念のため甲虫類が良く調査されている神奈川県、福井、山口の各県から出ている調査報告書を見てみたが三県共本種は記録されていないようである。

標本は 1 頭を筆者が、もう 1 頭を和泉敦夫氏が保管している。

最後ではあるが、種の確認をしていただいた和泉

敦夫氏に心からお礼申し上げる。

(東京都世田谷区, 沢田和宏)

Hiromichi Kôno (1942), Die Rüsselkäfer auf der Ins.
Kashôtô, *Insecta Matsumurana* XVI (1, 2): 27-30.
(大阪府茨木市, 谷角素彦)

○緑島で記録したカタゾウムシ4種

蘭嶼(紅頭嶼)とともに緑島(火烧島)は、台湾本島とは生物区を異にしている。鹿野(1935)は、ウォーレス線を台湾本島と蘭嶼・緑島の間まで延長することを主張し、この2島はパプア・マレー地区に属することになった。フィリピン諸島を分布の中心とするカタゾウムシ類はまさに、台湾のこれらの島々の生物相を特徴づける重要な昆虫となっている。

筆者は1989年7月、緑島で採集を行なった。その際、4種のカタゾウムシを得ているので、報告したい。発表にあたり、同定でお世話になり種々御教示くださった黒沢良彦博士、森本 桂博士、佐藤正孝教授に深謝したい。

1. ゴマフニセカタゾウ (写真1)

Kashotonus multipunctus Kôno, 1942

11頭, 15. vii. 1989; 23頭, 16. vii. 1989 ほか。

今回記録した4種のうちでもっとも個体数が多かった。人家周辺の植え込みによく付いている。

2. ソナンカタゾウ (写真2)

Pachyrrhynchus sonani Kôno, 1930

7頭, 15. vii. 1989; 7頭, 17. vii. 1989 ほか。

人家周辺の植え込みでも稀に見られたが、火烧山に多い。モクマオウの幹に付いているものが大半で、草本(種名不明)にも見られた。火烧山のカタゾウムシでは、もっとも目にするものの多かった種類。

蘭嶼産とは、上翅の緑色縦筋が横筋で分断されることなど、形態的に若干差異がある。

3. コウトウカタゾウ (写真3)

P. tobaefolius Kano, 1929

1頭, 16. vii. 1989; 2頭, 17. vii. 1989。

得ることのできたのは3個体のみ、火烧山のモクマオウの幹で、ソナンカタゾウに混じって見られた。

4. カシヨウトウカタゾウ

Metapocyrtus kashotonus Kôno, 1942

1頭, 17. vii. 1989。

1個体のみ採集。記載以降、確実な記録がないようで、森本博士に同定していただいた。

緑島のカタゾウムシについては、鹿野(1935)が4種を紹介、Kôno(1942)が4種をとりあげそのうち2種を新種記載している。これらを整理してみると、緑島には6種のカタゾウムシが記録されていたことになる。今回のリストに登場しないものでは、スジカタゾウ *P. yamianus* とマルモンカタゾウ *P. sarcitis kotoensis* が分布することになっている。

参考文献

鹿野忠雄(1935), *Pachyrrhynchides* 群の甲蟲と其の地理的分布, 日本学術協会報告 10(1) 第三部(A) 生物学方面: 1-5.



1. ゴマフニセカタゾウ
(緑島産)



2. ソナンカタゾウ
(緑島産)



3. コウトウカタゾウ
(緑島産)

○冬季にスギの樹皮下より採集されたホングウチビクロコメツキ

ホングウチビクロコメツキ *Ampedus honguanus* OHIRA, 1962 は愛知県本宮山を基準産地として記載された小型のコメツキムシである。記載以降、那智、大台が原、高知県黒尊から点々と記録されているが、個体数は大変少なく、その生態についても詳しいことはまったく明らかにされていない。

筆者は、幸いにも冬季にスギの樹皮下より採集された標本を検査する機会を得たのでここに報告しておきたい。

1 頭、神奈川県相模大山, 5. i. 1989, 川田一之採集。

アカコメツキ属 *Ampedus* の幼虫は朽ち木中で成熟したものが基本的には秋から冬にかけて成虫となり翌年の活動時期に蛹室内から外に脱出するのではないかとされている。しかし、朽ち木中で成長するアカコメツキ属の幼虫の成長状態をよく観察するとまわりの環境条件の違いからか、幼虫、さなぎ、成虫などの様々なステージがみられることがあり、必ずしも上述したような様式をとらない場合もある。本種の場合も、基本的には同様な生活様式をもつのではないと思われるが、なんらかの理由で晩夏から秋にかけて野外に遅れて出現した個体は、ほとんど活動もしないまま樹皮下などに隠れて越冬し、翌年の活動に備えるのではないだろうか。

これまで本種は愛知県以東からの記録はなく、今回確認された相模大山は、関東から最初の記録となる。

末筆ではあるが、本種を採集され、標本を提供して下さいった川田一之氏に厚くお礼申し上げる。

(東京都世田谷区、鈴木 互)

○空中ですくったゲンゴロウ

筆者は岐阜県天生峠(あもうとうげ)付近で以下のゲンゴロウを採集した。いずれも飛翔中の個体をネット・インしたものである。

1) マメゲンゴロウ

Agabus japonicus SHARP

平地から高山帯まで分布。中部地方の高山(標高2000 m 以上)には *ssp. shiroumanus* がいるが本個体は阿部光典氏によれば、点刻等から見て平地産と変わらないという。

1 ♀, 岐阜県大野郡白川村天生峠(標高1290 m), 20. v. 1990

2) クロママゲンゴロウ

Agabus optatus SHARP

比較的高標高地の清流および湧水のある湿地を好む種。平地では少ないという。

1 ♀, 岐阜県吉城郡河合村天生湿原(標高1100 m), 20. v. 1990

天生峠は白川村～河合村を結ぶ峠で、付近は流水の見られる湿原となっている。当日は快晴で気温も高く、ミズバショウが満開。他の小甲虫も数多く飛

びまわっていた。2 個体ともに0:00PM～1:00PMの間に採集した。ゲンゴロウの生態の側面を示すものとして興味深い行動と思われるので報告する。

末筆ながら同定をお願いし、種々ご教示いただいた阿部光典氏にお礼申し上げます。

(東京都北区、荒井充朗)

◇ 名古屋支部会の記 ◇

この会は、毎年3月の第2日曜日に開かれている。今年は招待スピーカーとして埼玉県所沢市にお住いの、平井 勇氏をお招きし、3月11日に愛知県産業貿易館で開かれた。

講演は次の如し

穂積俊文: 鍋田干拓の甲虫

蟹江 昇: コバヤハズカミキリ雑話

野平照雄: 昆虫誘引器(マダラコール)の使用経験

平井 勇: フジコバヤハズカミキリの分布と生態について

穂積の話は、愛知県弥富町鍋田干拓での灯火採集の報告で、ハネカクシの多いことを語り、ナガドロムシ科とハネカクシ科(*Bledius* 属)にそれぞれ未記載種と思われる種が一種ずつ発見されたと説明。蟹江氏は東海地方のコバヤハズカミキリの分布を語った。野平氏の、昆虫誘引器の話に対しては多くの質問が集まった。誘引器に入った昆虫は大丈夫だが、その周辺に集って止まっている虫は、ヘビ、トカゲ、小鳥や捕食性昆虫に、狙われるらしい。

平井氏は関東一円を精力的に歩いてフジコバヤハズカミキリの調査をされており、その詳細な話に一同感心した。

終了後、例の如く初寿司で懇親会を実施し、今年の抱負を語り合った。

出席者氏名(順不同): 青木哲郎、太田克人、井野川重則、今村隆一、岩崎 博、蟹江 昇、河路掛吾、坂上光一、佐藤正孝、清水清市、高井 泰、野平照雄、中林博之、長谷川道明、林 英明、伏原隆明、穂積俊文、平井 勇、前嶋孝雄、松永晴彦、湯沢宣久、山本雅人、秋田勝己、石黒昌貴、村田弘吉。(穂積記)



◇ 会員動静 ◇

◎住所変更

小宮次郎 154 世田谷区下馬 3-2-14

◎退会 永田岳夫

◎死去 下山健作

◇ 例会報告 ◇

1990年6月例会は恒例の採集談話会として、福島県檜枝岐村七入の七入山荘を宿舎とし、6月22日(金)～25日(月)の4日間にわたり開催いたしました。23日(土)は夕食後、一人一話形式の談話会をおこない、多彩な話題が提供され盛会となりました。会期中3日間は梅雨時とは思えぬ好天に恵まれ、各自相応の成果を得て無事終了いたしました。今回は、四国・九州から遠来の会員もあり、参加者は37名、参加車輛13台。林道通行と入林に際しご配慮を頂いた森林総合研究所の横原 寛氏、ならびに山口営林署檜枝岐担当区の各位に厚くお礼申し上げ

げます。

参加者氏名(ABC順): 阿部光典, 青柳鷹之介, 江本健一, 藤井誠慈, 早川浩之, 岩田隆太郎, 和泉敦夫, 笠原須磨生, 片山善仁, 菊地秀樹, 岸本年郎, 小島弘昭, 高麗泰行, 黒沢良彦, 横原 寛, 磨 尚之, 松本浩一, 見山 博, 中村俊彦, 西山 明, 野田正美, 奥島雄一, 齊田義典, 須田 亨, 高崎鉄也, 田尾美野留, 田添京二, 露木繁雄, 上田康之, 渡辺 崇, 渡辺泰明, 渡辺美智子, 渡 弘, 山崎裕志, 吉田篤人, 吉原一美。

(笠原記)



(上) 山荘前にて、1名行方不明(トラップ回収中!?)

(左) 酒トラップに集まったムシ(?)



日本鞘翅学会

会費(一ケ年) 5000 円, 次号は 1990 年 12 月上旬

発行予定

発行人 上野俊一

発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町 3-23-1

国立科学博物館昆虫第1研究室

電話 (364) 2311, 振替 東京 8-401793

印刷所 (株)国際文献印刷社

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針 00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6 号, 有頭ダブル針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷 1 丁目 7-6

振替 東京 (3) 21129

電話 (03) 409-6401 (ムシは一番)

FAX (03) 409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥6,200, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,870, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3 個以下 ¥1,300, 4 個以上 ¥850 (以下同様), 第2地帯 ¥1,500, ¥950, 第3地帯 ¥1,700, ¥1,050. 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥60)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話 (03) 811-4547, 振替 6-113479